

平成二十八年年度 香川大学 国語

(1)

問一	① 挑ん	② 固執	③ 補助線	④ 飛躍	⑤ 崩落
問二	コンピュータから幻想を見せられて「この世界」の实在を固く信じている人々にとっては、自らがいる世界が現実そのものであり、別様のテキストで考える余地もなく、自らを支配する解釈を信じて疑わないから。				
問三	決断とは、決断した者のみが事後的に己れの決断の真の意味を認識するものであるが、誤った「決断」をした者たちには、事態は相変わらずあいまいなまま仮象の可能性を帯びたままであり、己れの不決断の本質が見えないから。				
問四	この世界は、様々なテキストによって解釈可能であるが、一つの解釈を現実だと正当化できる絶対的合理的根拠は存在しないので、その解釈を盲目的に信じるしかない。その一つの解釈を信じる決断と選択に自由が存在し、その瞬間に世界の真実が認識されるということ。				

(2)

問一	① すんか	② もんちやく	③ しばらく	④ おももち	⑤ ぞうごん
問二	車掌としての業務に熱心で、不正乗車を見逃すまいと気を張り、身体的過労もあって非常に苛立っている。				
問三	戦争に敗れ、地位や名誉を失い、精神的にも痛手を負って逃げ落ちようとする、軍と関係があった男たちで混雑している状態。				
問四	車掌が青年士官の不正乗車を糾した際に険悪なやり取りがあったことで、青年士官が自身の立場の急な転落を悔しく惨めに感じているのが伝わってきたし、車掌が軍人としての誇りを打ち砕く発言をしたのは無理も無いが言い過ぎだと感じたから。				
問五	七月下旬の列車では、激しい空爆に対する恐怖と、無事を願う気持ちらが乗客全員に共通して車内に一体感があったが、この列車では、敗戦の混乱の中で、各乗客が置かれた境遇の違いが明らかになり、荒んだ心で人を貶めたり傷つけ合ったりしている。				

平成二十八年年度 香川大学 国語

[3]

問一	a せいりょうでん	b ちよく
問二	勅命とはいえ、自分の家の庭にある梅の木が理不尽にも掘り取られ、宮中へと運ばれていくのを惜しむ思いを込めて、和歌を木に結びつけた。	
問三	うぐいすが「私が宿としている梅の木はどこに」と尋ねたならば、どのように答えましようか。	
問四	姓名	文学作品名
	紀貫之	土佐日記
問五	勅命により京じゅうを探して得た梅の木を宮中に持ち帰り、帝からご褒美の衣服をいただいたが、梅の木の家の女主人である、貫之の娘の和歌をよんだ帝が、「まことに遺憾なことをしたものだなあ」とおっしゃって恥ずかしがっていらつしやったので、自分（重木）の行為を今生の恥と思ったから。	
	古今和歌集	歌集名

[4]

問一	爵鳥を城の隅に生む。
問二	すずめが鳥を生んだことに現れている、殷や紂王に福をもたらそうとする天の時運に逆い、国家を治めず横暴の限りを尽くすという福に背く行いをした結果、ついに外敵に攻められ滅亡するという災いを招いてしまったこと。
問三	野生植物が朝廷内に繁茂するのは凶事であるが、悪政を行っていた武丁が身を慎み行いを立派にして善政を行ったことで、遠国の王が徳を慕って朝貢したという事実によって、天からの災いも福に転ずることができるということを描出している。
問四	(始) 昔者殷
	(終) 亡殷国
問五	天からの災いはやはり避けることができるが、自ら招いた災いは逃れることができない。